

# 博物館ニュース 18-4

2007.01.10

## 新海竹蔵作の石膏像をインフォメーションセンターにて展示中

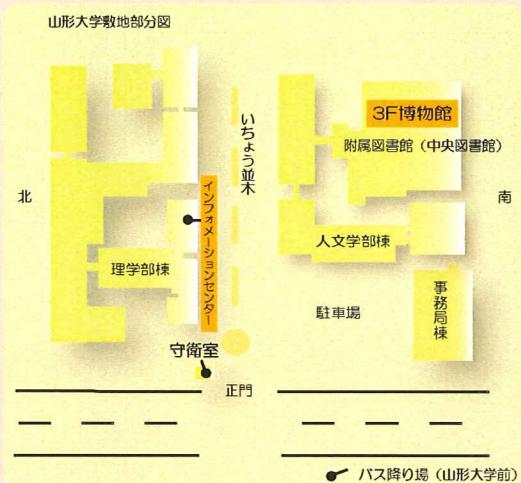


新海竹蔵による《母子》（石膏像）をインフォメーションセンターにて展示しています。この像の作者である、新海竹蔵は1897（明治30）年に山形市十日町生まれの彫刻家です。《ゆあみ》などで知られる彫刻家、新海竹太郎の甥にあたり、15歳の時に竹太郎のもとへ身を寄せ、以後彫刻家として活躍しました。

《母子》は新海竹蔵の文展でのデビュー作です。縁あって山形師範学校の工作室、その後は地域教育文化学部（旧教育学部）の彫塑アトリエに長年に渡って保管されてきました。しかし、年月を経て、移動を繰り返すうちに作者などの来歴が不明となってしまいました。

そこで2004年（平成16）年に本館の事業である学内の学術標本の対象として、山形美術館との共同による調査が行われ、第九回文部省美術展覧会に入選した新海竹蔵の《母子》であるとの同定に至りました。発見時の像の状態は制作年から約90年経っていることもあります、日展史に掲載されている制作直後の写真と比べると、表面の石工の剥離や彩色された石膏の汚れが見られました。展示にあたり、表面の破損箇所と下部には修復が施されています。本来、母親の首部分があった作品ですが、オリジナル性を保つために敢えて復元はおこなっておりません。

インフォメーションセンターは  
こちら↓



## 資料紹介☆闇夜を照らす有明行灯☆



インフォメーションセンターには、もう一点博物館の資料が展示されています。

それは江戸時代に使用されていた照明の一つの、行灯。常夜灯として用いられ、四角型の木の枠の中に火袋があり、満月や三日月の窓をつけたものを特に有明行灯と呼んでいます。有明とは明け方のこと、あるいは夜が明けた頃にまだ天に残る月のことをいいます。月のように朝まで夜の闇を照らす有明行灯は機能、デザイン、名称共に月を連想させる風情あふれる照明です。